

申し入れ書

青島幸男東京都知事 殿

私たち新宿連絡会（新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議）は、新宿駅周辺で野宿を強いられている労働者の自治的組織である「新宿闘う仲間の会」と、かねてから新宿駅周辺、都内各地の野宿労働者への支援（相談）活動を行なっていた2つの支援団体が統一して、昨年8月に発足した連合体です。

私たちの運動視点は、他の社会福祉団体や宗教団体のいわゆる「慈善事業」や、社会的弱者を利用しながら政治批判の種にするような「政治団体」とは異なります。

私たちの視点は、様々な理由から職や住居を失ない、野宿生活を余儀なくされた労働者が、厳しくも創意工夫あふれる知恵を出し合い生き抜いている、その自発性、内発性を尊重し、発展させる中で、外的要因によって奪われた（野宿者の）社会性を取り戻し、かつ野宿者の抱えている生活上の問題、様々な諸問題のより良い解決方法を共同で探って行こうとする視点であります。いわば住民（野宿者）参加型の共同プログラムを定立させながらこの問題に当たろうとする立場です。

具体的には、行政に対しては、失業者・半失業者としての、また野宿者としての権利を主張し、総体として生きるための条件を具体的に獲得して行くこと。そして、内的には自治的活動を強めながら、野宿者の社会的自覚を促しつつ「自立」にむけた共同性を獲得していく事。この2点を活動のベースにしながら私たちは野宿者の運動を推進して来ました。

また、私たちの運動領域は、新宿駅周辺のみならず、パトロール活動（夜回り活動）を通じて、都内各地の野宿者との関係を形成し、山谷を活動基盤とする兄弟組織である反失業（山谷と新宿をつらぬく反失業闘争実行委員会・準備会）の活動と合わせると、23区全域の野宿者に広がっています。新宿・山谷以外の地でも、まだ部分的ではありませんが、炊き出し、相談活動、行政交渉などを行なっております。

さて、私たちは知事あてに、トータルで4千名を超える団体交渉を求める署名簿を提出してきました。この署名簿は、署名要旨に記されているよう、東京都がとって来た私たちに對する門前払いの姿勢と、当事者の意見の反映されない一方的な「対策」の押しつけを改め、当事者との団体交渉（交渉としてまだ設定できないのなら、説明会でも意見交換会でもかまわない）を行ない、行政担当責任者が当事者とまずは顔を合わせ、信頼関係を形成してもらいたいとの希望を託したものであります。

昨年2月17日の「新宿西口地下道撤去事件」は、野宿者と東京都との関係を一気に悪化させてしまいました。本来、都道や公園に仕方がなく住まわせてもらっている私たちにとってみれば、それは、決して望ましい関係ではありません。お互い妥協しながら暫定的に住まわせてもらうのがより良い方法だろうと考えております。事実そのようにしながら私たちは生きて来ま

した。しかし、こちら側の言い分すら聞かず、一方的、強権的に道路管理権を行使してきた東京都に対しては、私たちも決して黙ってはられませんでした。生活の根拠が奪われるということは命の問題でもあります。2・17以降の抗議行動は生死を賭けた私たちの必死な抵抗でありました。

2・17事件は、鈴木都政が行なった最大の汚点です。平和なダンボール長屋を突如襲ってきた役人や警官の顔は私たちは一生忘れられる事が出来ないでしょう。そして、毛布を奪われ、寒さで亡くなって行った仲間の顔も私たちは一生忘れないでしょう。

あれから1年半経ちました。私たちは何度も都庁に足を運び、私たちの声を届けようとしてきました。が、都は常に門前払いを繰り返して、私たちの声と存在すら封殺しようとしてきました。都と私たちの関係は1年半におよび敵対関係が続いています。

が、長引く敵対関係は不毛です。その不利益は全て私たちに降りかかって行くのです。私たちは、厳しいながらも生き抜かねばなりません。そして、私たちが野宿を脱することの出来るような「対策」を是非、一日も早く打ち出してもらわなければなりません。2・17の謝罪がなければ、何ごとも前に進まないなどと、私たちは、あえて言うつもりはありません。この、お互いの関係を一方的にブチ壊した事件については、東京都が私たちに、二度と2・17のような強権的な行為を行なわないと確約してくればすむ話しだと考えています。

この4月に知事も変わり、担当部署の管理職も大幅に変わっています。この機会に私たちはお互い過去の禍根は腹の中で押さえ、真摯に、前向きに話し合いをしたいと申し入れているのです。

私たちの問題は、かつて東京都が取り扱った事のない難しい問題です。その意味で調整や予算化など、ある程度の時間がかかると言うのであるなら、私たちも性急に結論を求めません。力による解決（撤去・追い出し）を行わず、当事者との話し合いで結論を見いだすという姿勢さえあるのなら、私たちも粘り強く、当事者の意見を汲み上げ論議していくつもりです。

是非とも、知事が率先して、私たちとの交渉の場を作ってください。私たちは来週早々から、「路上生活者等に関する都区検討会」担当者である企画審議室・谷村課長との打ち合わせを行ないたいと考えており、既にその旨、谷村課長には電話で申し入れております。どうか、私たちの真意をくみ取り、善処されるようお願いいたします。

尚、私たちは、少数の者による秘密裏の会談、交渉（事務折衝はさておき）は決して望んでおりません。公開された会談、交渉が一番望ましいものです。私たちは上記したように、住民（野宿者）参加型の運動を追及してまいりました。当事者であれ、関係者であれ、関心を寄せている地域住民であれ、誰でも参加し、疑問や意見を交換しあえる場を設けることが、行政と都民との信頼関係を構築する唯一の形態だろうと考えています。私たちは「政治的」「運動的」な目的のために団体交渉を求めている訳ではありません。まともな教育すら受けられず、社会の底辺で働き続け、そして野宿生活へと落とし込まれた、無数の野宿者が、民主主義に触れ、自らの政治を獲得していきける場こそが、こういう行政との話し合いの場なのです。私たちは、仲間達にそういう場を提供したい。自らが意見をもつすばらしさ、そして、それを論議する中で、政治に参加している実感を是非とも持つてもらいたい。これが、本来の民主主義であるし、市民運動であると、私たちは考えています。技術的な問題は二の次の問題です。是非、多くの野宿者が話し合いに参加できる場を設定してもらいたいと考えております。

前向きなお互いの姿勢を確認しあい、お互いの力を発揮させ、この困難な問題に光を少しづつでもいいから、当てて行こうではありませんか。

そして、もう一つ、是非、知事に関心を寄せてもらいたい事態が、この間、顕在化しています。

この8月、東京都の基本的な見解として発表された、企画審議室・調査部の「新たな都市問題と対応の方向―路上生活」をめぐって」の姿勢とはまるで逆行するかのような動きが、東京都・建設局、および警視庁内に存在しているという事です。私たちはこれを新たな「撤去問題」として、非常に関心を寄せております。

東京都・建設局は、公園管理権、道路管理権を正当に行使するようにと、都管轄の公園管理事務所や、建設事務所などに通達を行なったと、聞き及んでおります。そして、この7月、8月と、代々木公園、戸山公園、上野公園などでは、執拗かつ徹底した、野宿者の荷物撤去作業が清掃作業と称して行なわれています。上野公園では、住居がわりにしていたブルーシートのテントを有無も言わず強奪し、ゴミと一緒に放棄し、かつ公園の外まで野宿者を追い回すといった、およそ信じられない追い出しが白昼堂々と行なわれています。戸山公園や、代々木公園でも、定期的な清掃（撤去）作業の回数が多くなり、たまたまその場に居合わせなかった野宿者の荷物がゴミとして処分されるなどの被害が多数出ています。確かに、公園での野宿生活は公園管理規則に抵触する事ではあると思いますが、今まで、公園管理事務所は公園利用者とのバランスの中、野宿者の生活がある程度容認していたにもかかわらず、突如、行政権力行使しながら、荷物を強奪し、野宿者を公園から追い出そうとする動きに転じた事は、まったく私たちには理解出来ない事です。

誰も好き好んで公園でのテント生活など送りたいくありません。福祉が対応出来ないから、高齢者にもつける仕事が少ないから、低所得者がすめる住宅が少ないから、野宿をせざるを得ないのです。長引く不況と行政対応が進んでいないため、長期にわたる野宿生活を余儀なくされれば、野宿者が定住化するのには当然の事です。公園で住む人はブルーシートでテントを作り、通路に住む人はダンボールで小屋を作る。これは、生き抜くための最低限の手段なのです。見てくれが悪いのは当然です。が、そこに人が生活している以上、行政が勝手に手をかける事は許されるべきではありません。違法占拠だからと立ち退きを要求し、話し合いで解決できないのなら、法的な手続きを取るべきです。清掃作業とか環境整備工事だとかの理由をつけたドサクサで小屋やテントに手をかけることなど言語道断であります。私たちはゴミではありません。生活をもった人間です。

新宿西口地下ロータリー部分でも、8月16日、新宿署・地域課による撤去作業が行なわれました。私たちの聞き取り調査では、5人の人が具体的な被害にあっています。衣類、生活道具が入っているバックなどが、ダンボールと一緒に廃棄処分にあっています。

また、4号街路のダンボール長屋では「9月一斉撤去説」がまことしやかに流れています。都庁側4号街路のようにフェンスで私たちが生活している場所を封鎖し、「動く歩道」を作るなる計画があるようです。都市博覧会も中止、地下鉄12号線の開通と同時に通行量も減る4号街路に「動く歩道」など必要でしょうか？私たちを追い出す事ばかり考える都市計画ほど滑稽

なものはありません。社会的な弱者を排除する国際都市など、諸外国に笑われるだけです。最低限の生活をしている人々の生活の根拠を一方的に奪うことほど残酷な事はありません。

この建設局、警視庁の独自の動きは、木を見て森をみない、近視眼的な発想でしかなく、東京都全体の方針とは明らかに大きく食い違うものです。行政に政策的整合性がなければ、混乱に拍車がかかるばかりで、事の解決には程遠くなるばかりです。

私たちは、東京都が公園管理権、道路管理権を放棄しろとは言いません。が、私たちをゴミ扱いにする一斉撤去作業は清掃作業と称しようが、環境整備工事と称しようが、金輪際止めてもらいたい。私たちが野宿を強いられている責任の全部とは言わないが、その一部は東京都にもあります。私たちが「自立」出来るプログラムが出来るまで、暫定的に私たちに公共機関での野宿する権利を認めてもらいたい。当然そこに発生する管理者との約束事は守ります。そして、苦情や工事や清掃など、私たちが野宿していることによる不都合な事があるのであるなら、私たちに直接、話しかけてもらいたい。妥協できる話であれば、私たちは生活の場所やスタイルを変えて行きます。その話しあい、もし決裂するのであれば、正式に立ち退き要求して下さい、私たちは正々堂々と裁判で争います。

権力をかざして、私たちの生活をおびやかすのはやめて下さい。追い出されても私たちにいく場所がないのです。知事の意向を無視し、勝手に撤去作業を繰り返し、私たちの生活を脅かしている建設局・警視庁には、知事直々、断固抗議をして下さい。当然ながら、私たちも公園管理事務所や、道路管理者へは抗議の意思を届けております。撤去が止まない限り、私たちは東京都の新たな姿勢を信用する事は出来ません。

私たちの問題を都政の中でどのようにとらえ、どのような解決の道を計るのか、新たな課題だけに知事も頭を抱えているだろうと思います。が、事は最低限の生活を余儀なくされている人命の問題です。机上の論理だけでとらえず、是非、都庁のお膝元のダンボール長屋にもお越し下さい。私たちは熱烈に歓迎いたします。

一九九五年八月二十五日

新宿連絡会

(新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議)

台東区日本堤一の二五の一一 山谷労働者福祉会館気付け

〇三(三八七六)七〇七三